

FDニュース

発行日 2014年 8月 3日

1 日本大学 学生FD CHAmmiT 2013に参加して

目次:

日本大学学生FD
CHAmmiT 2013に参加し

1

国際グッドプラクティス

2

H25年度後期授業アンケート
集計結果について

4

日本大学本部で学生が主体的に教育改善に向けて活動する学生FDが昨年度からはじまり、2014年2月26日に、気軽に話すChattと会議をさすSummitをかけた第1回日本大学学生FD CHAmmiT 2013が開催されました。参加した森谷賢太さん(国際総合政策学科4年生)に、その様子と学生FDについて話を聞いてみました。森谷さんは国際関係学部でも学生FDを立ち上げたいと考えています。

(インタビュー:長嶺 宏作)



長嶺宏作(助教):本部の学生FD CHAmmiTに参加されたきっかけと印象はどういったものでしたか?

森谷賢太:もともと昨年度、留学生と本学部学生の交流を目的としたバディープログラムのリーダーをやっていて、それで学生課の職員の方と面識があって誘われました。まず、11月16日に初顔合わせの時に各学部から来た15名の代表が集まって会議が開かれたのですが、そこでだんだんと興味が湧いて、面白くなったという感じです。

長嶺:他の学部生との交流で、どんな話をされたのですか?

森谷:本当にいろいろな話をしました。その中でどの学部の学生ともに共通していたのが、日本大学は総合大学なのに、他の学部の様子がわからないということでした。

長嶺:その話の中で、国際関係学部の特徴は、何だと感じましたか?

森谷:国際関係学部は学際的だと感じました。悪くいえば、広いのはいいけど、浅くなってしまうというのが課題の一つかなと。例えば、文理学部は国際と同じように広く勉強する事も出来るし、国際では出来ないほど一つの分野について深く学ぶ事が出来る。国際は間口が広くていいのかもしれないけれど、もっと深く理解する機会があってもいいのかもしれないなど。

長嶺:逆に共通する課題というのはありましたか?

森谷:どの学部にも共通の課題として必修の授業の成績評価の基準と授業内容のバラツキについて、話題になりました。必修は先生を選ぶことはできないが、担当した先生によって内容や評価が異なるので、調整をしてほしいという意見です。

長嶺:必修授業の内容の調整は、どこまでやるのが難しい問題ですね。

森谷:本部の学生FDは、各学部を代表している学生なので、教員のFDが授業の質の向上を問題にしているように、

学生FDは学生の質もあげるということを考える必要があるのではないかと声があがったのも発見でした。特に1年生は、まだまだピュアなので、学生FDを通して良い意味で影響をあたえることができるのではないかと、ということです。私自身、留学生のバディープログラムやサークル活動などをやっている、後輩をどうやってひっぱりあげていくのかを考えるとときがあるので、勉強になりました。

長嶺:でも、具体的に国際関係学部の学生FDで何をするのかは、未定ですね。他の学部の活動にはどういうものがあると聞いていますか?

森谷:文理学部の学生FDは、学生提案型の授業をメインに取り組んでいましたね。でも、各学部の事情にあわせて活動ができればよいと思っています。本部の学生FDでも、私はファシリテーターとして小グループに分かれて議論していたのを聞いていましたが、テーブルによって上手くいったところといかないところがありました。裏方として、あらかじめ寸劇を通して、お互いに聞く耳をもって共通認識をもってもらおうとしたのですが、学生と教員が対立してしまう場合や、逆に学生側が圧倒して不満だけをいってしまうグループもあって、難しいと思いましたね。ねらいとしては、これからどう良くしていこうかを議論してもらおうかと考えたのですが、お互いの不満の言い合いになってしまったグループもあったので、そのあたりが課題です。教員側と学生側の双方の意識を共有することの重要性を痛感しましたね。私としては、もっと交流の場をつくるということから始めたいと思っています。ある授業で留学生がいたので、授業が終わった後に先生と共に、みんなでご飯を食べて授業について話をしました。この時、先生のことが詳しく知れましたし、学生同士も理解しあうことができました。学生FDでは、そういう機会を作りたいと考えています。

長嶺:そうですね。今日はありがとうございました。

2 国際グッドプラクティス

今日は、平野明彦教授の「倫理学」の授業にお邪魔しました。「倫理学」の授業は、受講者が約140名程度で、1・2年生が主の総合教育科目です。今日、訪れた授業は、ジェレミー・ベンサム「功利主義」についての授業でした。

(インタビューアー:長嶺 宏作)

① 平野明彦教授「倫理学」

長嶺宏作(助教):授業のはじめに、リアクションペーパーとして前回書いたものへの回答から始めていましたが、毎回、実施しているのですか？

平野明彦(教授):15回の講義のうちに10回程度行っています。リアクションペーパーで、講義で説明したことが、学生に誤解を与えていないのかを確認するとともに、学生のユニークな意見を拾い上げて講義内容の理解を深めるのに使っています。

長嶺:15分程度使って、リアクションペーパーから7-8人ぐらいの学生の意見を紹介していましたね。

平野:できるだけ多くの学生の意見を紹介するようにしています。時間があれば、全学生の意見を聞いていく必要があるのでしょうけど、時間的に難しいので7-8人程度の学生のペーパーを紹介しています。ただ、学生には講義で紹介されないからといって、必ずしも間違っているわけではないことは、いつも説明しています。

長嶺:リアクションペーパーの後は、いよいよ「功利主義」の説明ですが、今回、「列車が暴走し、目の前の5人が亡くなりそうなときに、あなたはルート切り替え装置で助けることができるが、ルートを切り替えると、切り替えたルートの先に一人いて、その人が亡くなる。あなたはどうするか？」という有名な命題を提示して、学生たちに考えさせていましたね。

平野:哲学や倫理学は、自分の頭で考えなければ意味がないので、できるだけ考えさせるように働きかけています。わからない場合でも、なぜわからないのかという理由について聞いて、自分の言葉で語らせるようにしています。

長嶺:今回は功利主義がテーマですので、私であったら、「最大多数の最大幸福」とか「快＝幸福で質を問わない」などを提示してから説明するのですが、一度、原著の抜粋を読ませてから説明していましたね。

平野:もちろん重要な点はレジュメのプリントに書いてありますが、学生には先入観をもたずに自ら哲学者たちの考えたことを感じてほしいと考えています。もしかしたら、何か新たな発見があるかもしれません。だから、授業ではほぼ毎回哲学者たちの代表的な著作を紹介し、受講生の中で一人でもいいので原著を読んでくれば、と思っています。

長嶺:その点では、平野先生は哲学者の考え方に寄り添って説明しているなと感じました。私なんかは自分の好き嫌いが出てしまうし、現代的な視点から論じることが多いのですが、その人物がいた時代背景、ここではベンサムがイギリス階級社会を批判していたとか、当時は哲学的急進主義者といわれていたという点も説明した上で、ベンサムの哲学が何であったかを説明されていましたね。



平野:私の授業の基本は、二つあります。一つは、ヴェーバーの有名な言葉を引き合いに出すならば、「価値からの自由」「wertfrei」ということで、つまりこちらの主観を極力排除して著者の言葉そのものに耳を傾けてもらうことです。その時、幾分手垢のついた言葉や概念を理解するため、その時代背景に戻らなければならない場合もしばしば起こります。例えば「最大多数の最大幸福」の問題点として、今日ただちに「多数派の横暴」が挙げられますが、そもそもベンサムの時代の英国では「少数派の横暴」が問題となっていたわけです。また、講義全体を通して、あえて対立する考え方を紹介するように努めています。二つ目は、すでに先生にご指摘いただいた通り、学生が先入観を持たずに自由に考え発言する機会を作ることです。

長嶺:学生はあまり笑っていませんでしたが、「当時、イギリスでは貴族はキツネ狩りというのがありまして、おやじ狩りではありませんよ」とか平野先生のちょっとしたギャグが個人的には面白かったですね。

平野:緊張をほぐしリフレッシュしてもらうため、と言えば聞こえはよいのですが、特に意識しているわけではありません。悪い癖とでも言いましょうか。

長嶺:大学の勉強というのは、本質的には「何かに疑問を持って考える」ということだと思うのですが、逆に学生は何か解答を求めて勉強しているような気がします。というのは、リアクションペーパーでの学生の答えが良くも悪くも模範的で、もっと異なる意見を持った方がいいのではとも思ったのですが、どうでしょうか？

平野:実際には、もっと多様な意見があるのですが、まず授業の内容を正しく把握していることを前提にすると、どうしても模範的な回答が多くなってしまいます。また、以前に比べ最近の学生は、「与えられた考え」をスポンジのように吸収する傾向が強く、相手を理解したうえで、一定の距離を置いて批判的に考察することが苦手なように感じます。日本人の話下手は昔から有名ですが、特に問題なのは、自己主張うんぬん以前に、まず相手の言葉をきちんと理解する能力の欠如だと思います。

長嶺:今日の授業では、残念ながらベンサムの「最大多数の最大幸福」という命題までにたどり着かなかったのですが、次の授業が楽しみです。本日はありがとうございました。

② 石川元康准教授「公衆衛生学」

今日は、石川元康准教授の「公衆衛生学」の授業にお邪魔しました。「公衆衛生学」は、短期大学部(三島校舎)食物栄養学科の科目で、受講生は約70人になります。今回の授業は、「主要疾患の疫学とその予防」として、肥満、糖尿病、骨粗鬆症についての理解と、その対策についての授業でした。

(インタビューアー: 太田 尚子)



太田尚子(教授):授業では、パワーポイントが効果的に使われていて、内容がわかりやすく、見やすいと思いました。

石川元康(准教授):科目の特性上、最新の統計資料が必要ですが、図表を板書できないので、パワーポイントを利用しています。本日の授業は、「主要疾患の疫学とその予防」ということで、肥満、糖尿病、骨粗鬆症についてですが、統計データは毎年変わりますし、糖尿病の判定基準なども医学の進歩によって変わっていきます。それらを整理して提示する必要があります。

太田:データを丁寧に説明されていましたね。

石川:データはできるだけ正確なものだけでなく、どういうデータなのかを説明するようにしています。例えば、糖尿病の患者数は増加しているのですが、高齢化に伴って高齢者数が増加しているという背景もあります。したがって、単に日本国民の糖尿病の罹患率が増加していると考えるのではなく、年齢や性別などの影響を考慮する必要があります。その点を確認しながらも、社会構造の変化に合わせて国民病となっている点など、説明するようにしています。

太田:授業では、学生がスマートフォンなどを使っていますが、学生の中には遊んでしまう学生もいますよね。

石川:スマートフォンで遊んだり、LINEをしたりする学生には、その対応に苦労しています。スマートフォンなどの利用目的は、本学で導入しているWeb学習システム「Blackboard」に掲載している講義資料を見たり、ノートに書きづらいパワーポイントスライド図表を「写真」させたりしています。授業の予習・復習に、学生たちの使い慣れたスマートフォンやiPadな

どを有効活用して、講義内容を深めてほしいと考えています。デメリットもあるのですが、メリットが大きいということもあって、学生に授業中のスマートフォン利用を認めています。

太田:授業の最後で「演習プリント」を実施して、学生自身が得た知識を整理する時間を設けていましたね。

石川:パワーポイントで説明する一方で、書くことで内容理解が深まると考えているので、毎授業の大切なところは「演習プリント」を配布して、授業で説明した語句の定義などの確認事項を記述させています。添削した「演習プリント」を次回の授業で返却しています。ミス直して、講義のまとめ資料として活用してもらおうという考えと、出席チェックも兼ねていて、学生の授業の参加を促しています。

太田:授業の雰囲気としては、先生が学生に話しかけるような、親しみやすいものとなっていましたね。

石川:学生にわかりやすいように話すことを心がけています。また、学生(特に後方に着席している学生)の様子を見て回りたいので、教室を巡回しながら話をしています。

太田:学生にとって健康というのは、まだ現実感がないかもしれませんね。健康診断などでも年齢が一定以上いかなないと、血圧やコレステロールなどは気にしませんからね。

石川:今日は肥満の話でしたので、中高年になると気になる“メタボ”や“コレステロール”などは、多くの学生にとって未来の話なのでしょうね。ただ、ダイエットなどで自身の身体のことを気にしたり、家族や親せきの中に生活習慣病を患っている方が多いと思うので、公衆衛生学に係わる内容は身近な問題として認識していただきたいと思っています。

太田:全体の授業内容としては、他の科目とのオーバーラップが多いに関わらず、それを公衆衛生学という見方でうまく授業を展開されていて、すばらしいと感じました。

石川:授業のカリキュラムの体系は意識しています。それぞれの基本的な要素を確認しながらも、公衆衛生学の視点から、その予防策について管理栄養士を目指す学生に考えてもらうのが、この授業の目的でもあります。

太田:今日は、ありがとうございました。



3 H25年度後期授業アンケートの集計結果について

表1 国際関係学部授業アンケート科目別結果

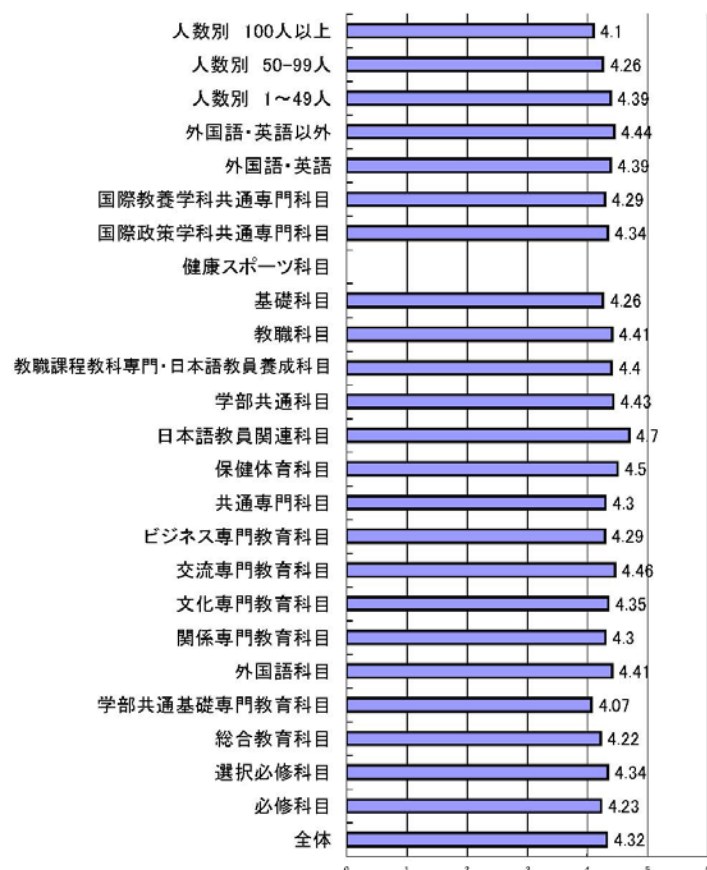


表2 短期大学部授業アンケート科目別結果

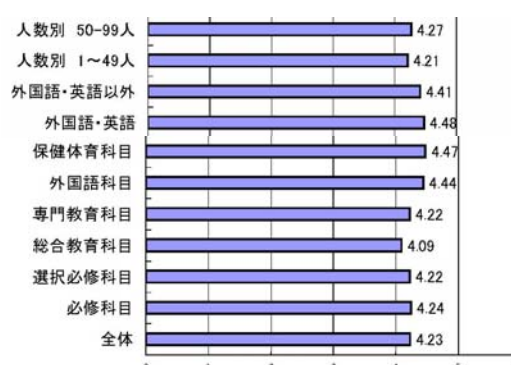
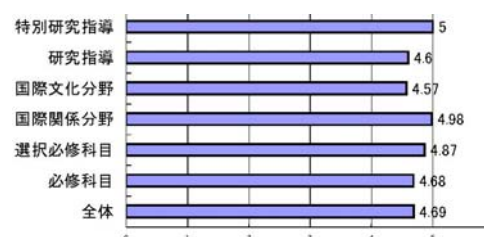


表3 大学院授業アンケート科目別結果



平成25年度後期の授業アンケートは表1・表2にある通りの結果となりました。各授業担当者が授業評価の詳細を参照し、授業改善に役立てていただければと思います。国際関係学部授業評価アンケートのH25年度の全体の平均は前期が4.24、後期が4.3でした。経年変化をみると、H22年度前期が4.2、後期が4.3、H23年度の前期が4.17、後期が4.22、H24年度の前期が4.22、後期が4.3と変化しています。後期の方が平均点が上がる傾向は変わらず、全体の推移としては、ほぼ横ばいといって良いでしょう。

短期大学部の平成25年度授業アンケートの全体平均は、前期が4.24、後期が4.2でした。経年変化をみると、H22年度の前期が4.0、後期が4.1、H23年度の前期が4.0、後期が4.16、H24年度の前期が4.14、後期が4.24と変化しています。短期大学部も全体平均は、ほぼ横ばいですが、今までとは異なり、前期に4.2台を示しており、底上げされていることがわかります。大学院は受講者数も少なく、授業形式も異なるにも関わらず、項目が学部生と同じで無理があります。早急に大学院用のアンケートを検討する必要があると感じます。

個々の結果を見ると、大人数授業と、学部共通科目などの必修科目で評価が低い傾向があります。この傾向は変わっていないために、こうした科目への支援と対策が必要です。

また、昨年度の後期から試験的にアンケート入力Web化に取り組んでいます。アンケートの回収率の観点から、紙でのアンケート回収も継続することになりました。担当教員は学生が回答しやすい形式を選んでいただき、結果を回収してください。

最後に、日本大学の本部でも一層、FD活動に力を入れております。その一環として、授業アンケートの項目の中に共通の質問事項を入れることになりました。昨年度の項目と異なる点があるので、ご注意ください。本号でも取り上げましたが、日本大学においても教員だけでなく学生FD活動も、はじまっています。教員と職員と学生が一体となって、より豊かな大学教育が実現できればと願っております。

(FD委員会)